

本のご紹介：『下町ロケット』

今夏、「倍返し」で話題を呼んだテレビドラマ『半沢直樹』の原作者と同じ池井戸潤が書いた企業ドラマです。

特許を保有する下町の工場とその特許を必要とする大企業の攻防を描いています。工大卒業生の多くが技術畑に進むと考えられ、本書を勧める次第です。

「特許制度」とは、新しい技術を公開する者に対し国が一定期間独占権を与えることにより、全体的に技術開発を促進しようとするものです。

技術の「進歩性・新規性」を審査し特許を付与するのが特許庁の仕事です。特許を取得しようとする新しい技術は、出願 1 年半後に公開されます。この「公開制度」を利用してライバル会社の技術開発動向を探ったり、技術開発に先駆け先行技術や特許技術を確認することで、技術に係る企業やその最新の技術を知るとともに他社の特許を侵害しない技術開発が可能になります。

したがって特許を扱う部門は、技術と法律の知識が要求されることから、会社の組織上技術部門の中に置かれる場合もありますし法務部門に置かれることもあります。何れにしましても、会社の経営にかかる重要な提言をする部門でもあります。

私は、企業で長年技術部門に属し、特許管理部門を担当しておりました。

私も米国へ製品を輸出している企業から、特許担当役員としてヘッドハンティングを受けたことがありました。調べましたら、米国企業から侵害訴訟を起こされ、このために 20 人もの人員が配されおりその管理者退職が理由でした。

現実には多額の損害賠償金を獲得するため市場を監視し、模倣製品が売れ始めたのを確認して侵害訴訟を行ったりします。特許部門は他社との攻防・交渉の拠点にもなります。

私の実際の経験から、『下町ロケット』は会社の活動を揺るがすこともあるという特許のひとつの側面を良く描いていると感じ推薦しました。

特許管理などについて興味があればお問い合わせください。

皆さんが特許を知るには、まず「特許庁」のホームページにアクセスされるとよいと思います。

以上

平成 25 年（2013 年）10 月 27 日 井田晃記